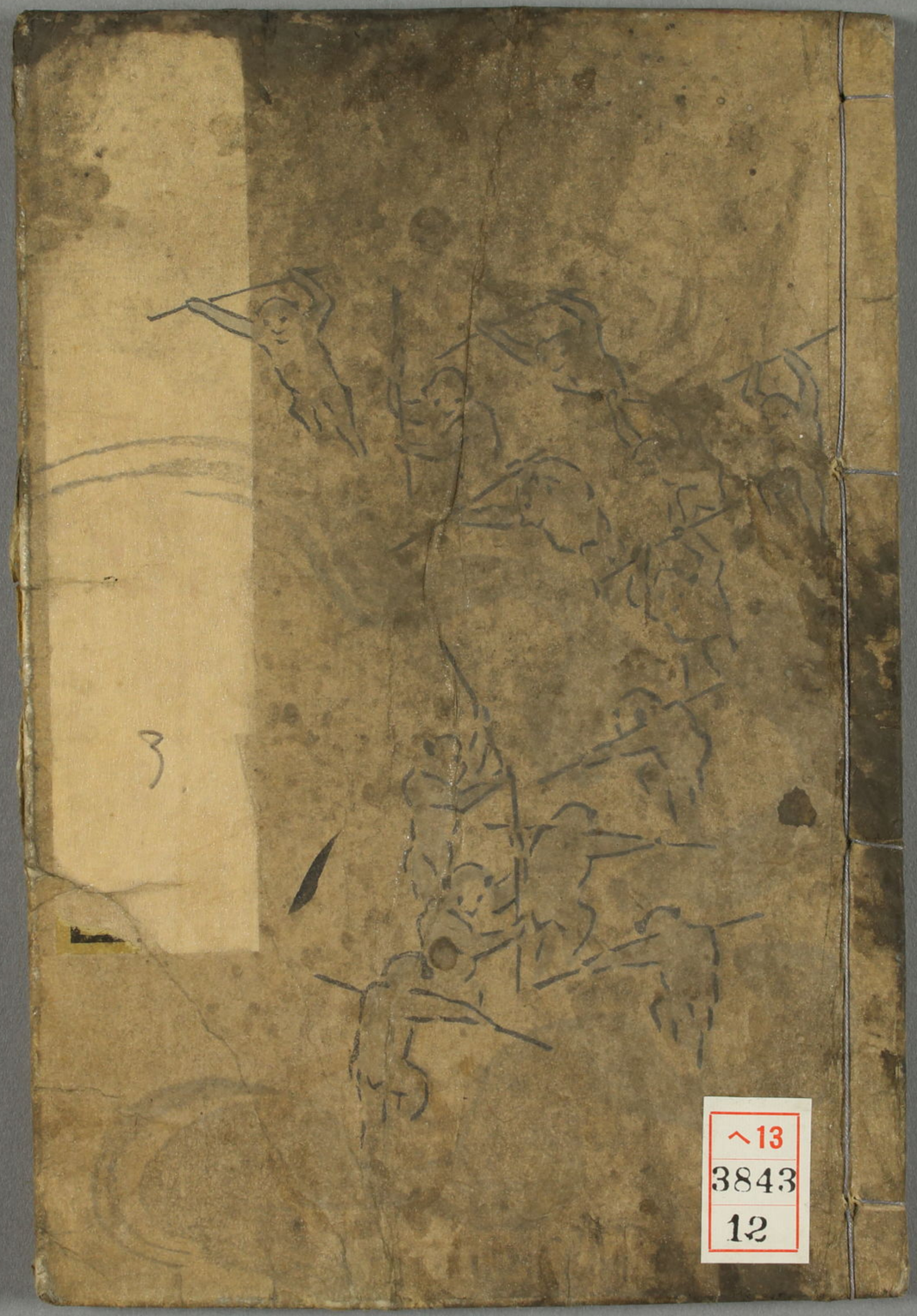


へ13
3843
12

13
3843
12

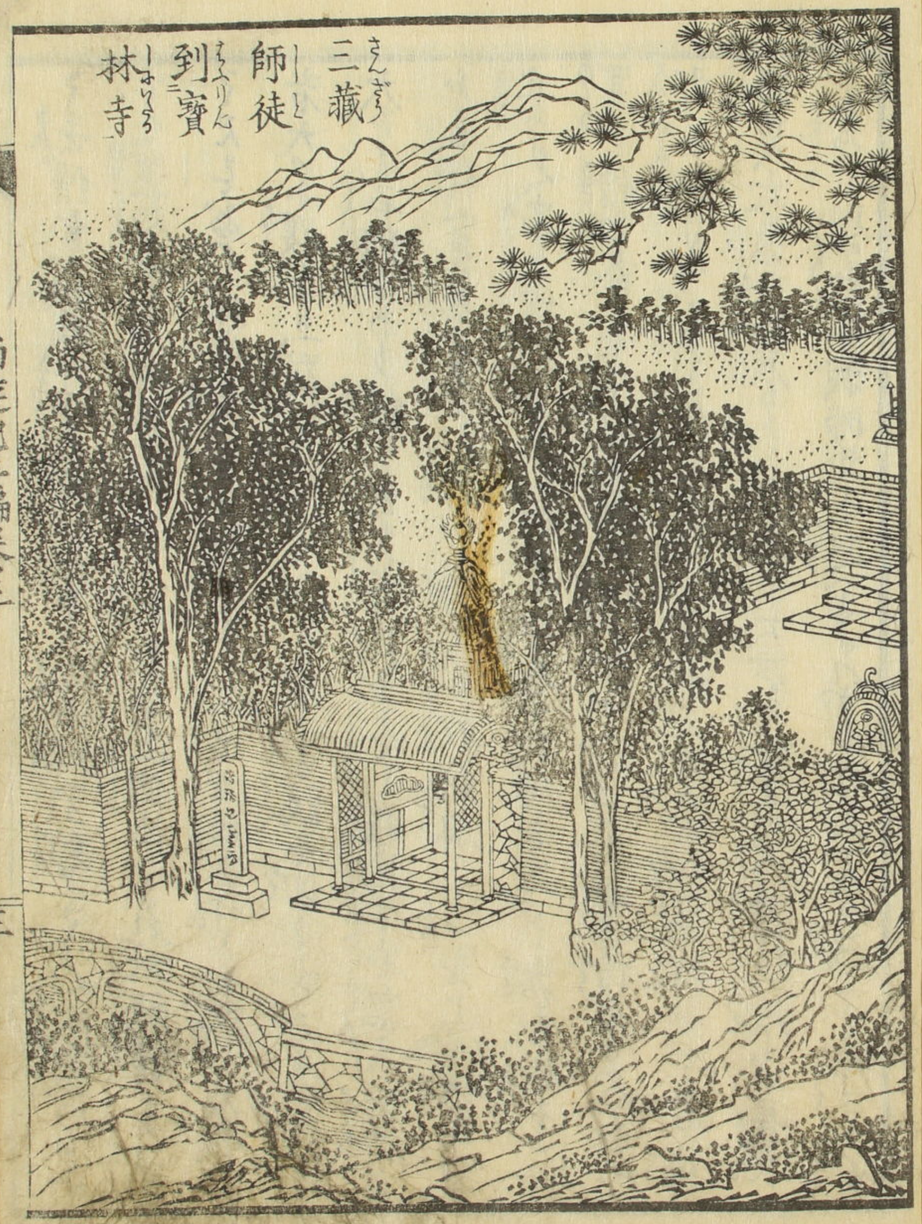
繪本西遊記二編卷之三

心猿正處諸緣伏　劈破傍門見月明

却説孫行者八雲頭を按落老君のまを備ふ師又ふ結ばれぬ。三藏是を感歎し夫より師徒進ぐ行ること數日ふしく一日天色將ふ晩んとするふ山乃四方る裡ふ樓臺畳々殿閣重々しる式乃る。却て是一坐乃寺院なり三藏馬を下を進ぐ山門ふ至り乃るふ額ふ五個乃大字を鐫て勅賜宝林寺とあり。三藏顧て曰。徒弟们ハ茲ふ待我院内ふいざりて宿を借んと。進ふ山門ふ入て乃るふ両辺ふ一對乃金剛神と坐しり。三層門ふ到を乃れハ四天王乃像を排列し。大雄宝殿ふいるて三藏合掌して是を拜し。佛臺を廻りて後面ふ到を乃るふ観音の像あり。三藏又是を拜し旁門乃裡より一個乃道人出きり

ぬ三藏則ち道人に向ひ貧道は是東土唐の使西天にいり佛を拜し經を求んとす今宝刹にいり天晩に及びれば宿を乞ふ道人の曰我は僧官にあらず裡に老師あり今斯と告ん師又此所に待ぬ三藏ここに僧官に報じられば老師もまた門を開き迎へしば三藏を見て大いに不喜道人を罵て曰汝もとより我は是僧官なり只士夫降香ある時を我出迎て接す這ほの遊和尚の天晩く是非なく宿を乞ば前廊の下に卧しむるもの足なり何ぞ喋々我に報ずるやと身を轉じて内へ入ぬ三藏是を見て双眼に泪を流して長歎す我前世幾千の悪業をなせしや今生常に不良人に遇ひて身を悔て愁然として飯をいづる行者師父が満眼愁容として向て曰寺内の和尚何ぞ罵をいひし三藏が曰某

不使なり別里に行て宿を求む爾し行者が曰豈此理あらん我進て宿を求んと鉄棒を持て逕に殿上にいりぬる道人佛前に揷香して居り行者厲声呼れば道人驚て跌倒大に戰慄て滾々方丈へ蒐入老師に向ひ外面に又一人の和尚きたりと僧官が曰這獣子再び来て何をか為ん道人が曰這個の和尚は那の僧と一般にて満面毛ありて環眼さながら賈公の如く手に長き鉄棒を把て狼々的に人を呑んとする勢なり僧官是を見て門を閉ぢんとす行者早行者進きたる其面紙に醜形和尚慌て方丈の門を鎖て行者早く一脚を上て堅門を踏破し呼ぶ曰早く一千間を掃て老孫に借与へよ僧官房裡に躲き窓より胴て曰這荒山方使宜しく手別所に行て宿を求べ行者が曰汝に方使あらば手道具を搬出


三藏
師徒
到寶
林寺

悟淨
三藏
行者
八戒

さきに僧官が曰、我寺中の僧四五百人那の裡に到りさきん被高のこゝふて、置処者まゝ行者が曰汝を出だんで一個出きれ此鉄棒を減さんとぞ。和尚朝ごろに我決して不出。汝雖を呼ぶ試して行者大いに腹を立て羅等紙くの頭を取るに側に大なる石獅子あり。頓て走り寄棍を上て一下で忽ち粉碎と為る。僧官是を見て膽を消し骨敦觚麻く声を上て大徳手を止めて宿を借らせん。行者が曰先に我師きろく宿を求る汝罵て借ぜ今吾手段を見て借んとす。何ぞ薄情なる。今汝と那石獅子ろづくなるべ。吾師文西天に赴て経を取の猿路ゆく大慈悲心発りて汝を始寺内の僧徒殘ず長衣を剥て慇懃に我師文を迎へきれ。もなくば一人も殘らず獅子の如く粉砕ふ。と威しれば和尚大いに恐を心付けて。那道人に云分付ふ道人行者が猛威に恐を怯て狗洞裡より抜出て本堂に上り鼓を撞て鐘を敲せば満山の衆僧一殺に集りきて。老師一々に分付各衣服を改め行者を先に立て山門の外に出て跪下中に僧官頭を叩て罪を謝して願くは唐老爺文方丈に入て按宿しまくと。三藏心悅ぶ。と虫さのごとく徒弟と俱に方丈に入れば衆僧斎を供ぜ管待す。三藏師弟吃罷て結て禪堂に入り坐禪す。其侭衆僧を退しめ三藏小門を逍遥て月に清く皎潔なれば悟空を呼ぶ俱に月を賞す。三藏懷を臭して一詩を賦て其詩に曰

皓魄當空寶鏡懸　山河搖影十分全

瓊樓玉宇清光滿　氷鑑銀盤爽氣旋
處々聰軒吟白雪　家々院宇弄朱絃
今宵靜玩來山寺　何日相同返故園

行者空をりて曰。師父月色光華を見て心に故里を思ひ出す。月家の意を知る。即ち天の法象の規繩なり。月三十日にして陽魂の金散て玄陰魂の水淪に盈て純黑にして光なし。即ち是を晦と云。此間日と相交る。晦朔兩日の間に在て陽光を感じて孕み初三日にして一陽現ず。初八日に二陽生て魄中魂半なり。故に上元と云。十五日に三陽備足す。是を以て團圓なり。故に望と云。十六日に一陰生て廿二日に二陰生ず。魂中魄半なり。故に下弦と云。二十日に三陰備足て又晦日あり。是先天採煉の意なり。我に能温養の功を

なす。故園返て亦安し。豈閒ならんや

藥味平々氣象全　前弦之後後弦前
採得歸來爐裡煉　志心切呆即西天

三藏安て一問に解悟。滿心歡喜して稱て悟空に謝て禪堂に同て悟空八戒汝僧等を退て睡る。三藏は經本をとて燈下に是を

よみて居たり

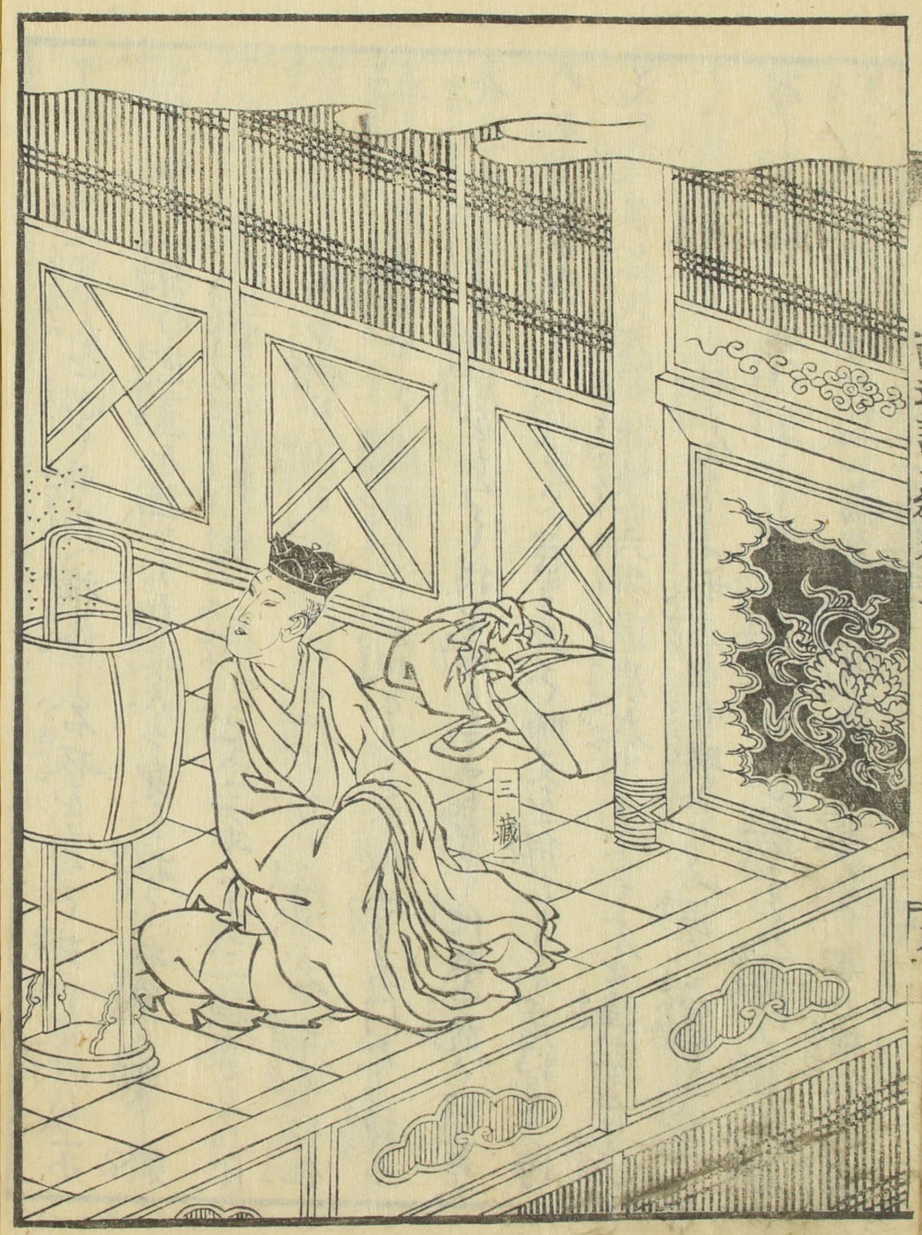
鬼主夜竭磨三藏　悟空神化引嬰兒

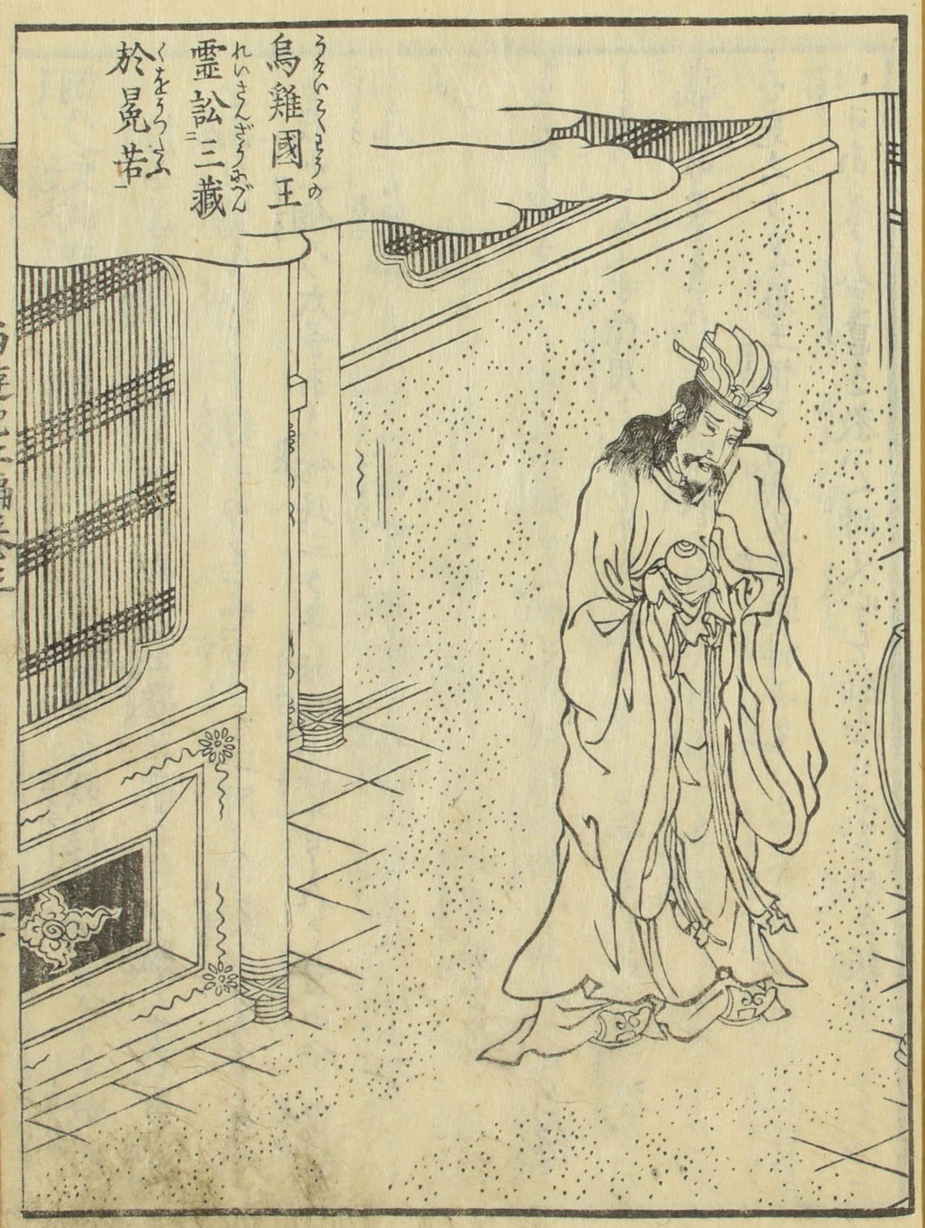
却說三藏は独禪堂に坐て燈の下に看經して居たるに忽三更の頃に忽ち一陳の怪風門外に生じて燈を削て或は明く或は暗く成

何となく身毛堅て覺へれば。三藏ふと頭を抬て見れば。燈のうげに一個の人渾身水に淋き眼中泪を垂て傳て三藏孫に曰。汝妖怪奈

何ぞ我禅門ふきられる早く去よと喝たるふ。那人曰我八是妖怪ふあらず。師父子細ふ我を見よ。三藏ぞ〻睛をたゝ〻るふ。天冠を頂き腰ふ碧玉帶を束ね。身ふ赭黄袍を穿ち足ふ無憂履を踏手ふ白玉珪を執り三藏大ふ驚き身を躬く向く曰。君八是一朝の陛下何ゆ為茲ふ至るや。那人泪を流し〻云。我家八此里を離るゝ四十里一坐の城地あり号く烏雞國と。五年前ふ天大旱ふ早し民皆飢死を。寡人是を悲み天地ふ祈と金更ふ其効なし。然るふ鐘南山ふ一個の全真あり。よく風を呼雨を祈る依く彼真人を請く雨を祈むるふ須臾ふして大雨降民の憂患を除り。寡人其德を好し他と結く兄弟となり宮中ふ同居たるゝ二年。一日陽春の比左右を退け他と只二人花園ふ春色を玩び行く八角の琉璃井の辺りふ

〻〻〻〻〻〻他寡人を把く井内へ推落し石板をもつて井口を掩ひ上ふ土弦布く一株の芭蕉を植たり。扨真人を身を揺く我姿と変し終ふ國王を奪ひ三宮六院盡く他ふ属し已ふ三年なり。三藏ぞ〻大ふ驚き然るふ御身何ぞ陰司閻王の所ふ行く斯と紛ざるや。鬼王が曰。他真人神通廣大ふして閻羅王と故旧なり。是ふ依告るふ門なし。夜遊神一陣の神風をもつて我を送りきたる。曾く他我ふ語く曰。三年の水災已ふ満ぬると。此ゆふ我きたつて師父を拜たるなり。師父の徒弟斉天大聖孫悟空六神通廣大ふして人を降たること更頭く八我國中ふいとり妖人を捉く邪正を弁明ふ八深く恩を感謝す。三藏が曰。我徒弟ゝ〻人を降とりぬ。只恐く八一個の難あり。鬼王が曰。何の難ぞや。三藏が曰。那怪たるふ変し〻君と相似る。


三藏


烏雞國王
靈訟三藏
於晃苦

朝の文武皆他を真の君王と為す。我徒弟他をさして妖人と
一対んとせば妻の官人却て是人を欺き國を乱す賊とせむ。是虎
を画て犬を刻て類ふあるべし。鬼王の曰。師父の疑ひさるるあれど
も我ふ一個の太子あり。他此三ヶ年妖怪ふ禁ぜられて宮ふ入て母親と
相見て能ずず。是ハ那妖怪母子相逢で長短の話説の間ふ却つて
已ぐるの露見して我恐るゝ故なり。即ち太子明早城を出て採猟
せんとぐるずきるて師父を拝せん。師父其間我物語の如むを説
しあるべずず信用せべ。於疑ぐ是を乃せるとて白玉珪を三
藏ふあたへきた。三藏結取て曰。此上ハ徒弟と高議して我先て人君
を先とする。鬼王悦で曰。我又夜遊神ふ乞て皇宮ふ入て夢を正宮皇
后ふあたて合意を教へん。師父必ず紛を防ぐべ。仇を報ずるとて。三

藏を三拝して立別る。三藏立上て門外まで送るふ一度跌て倒むて
忽ち却て覚て是一場の怪夢なり。茲ふ於て三藏徒弟ふ向て
きて呼ぶきた。悟空八戒汝和尚目を覚て起きて何の心や
と問。三藏の曰。我今怪夢を見て故ふ汝を呼て行者の曰。師父路上
ふ妖怪の妻を恐て且留音寺の遠を乗て種々の物を
見て老孫ふ千妖万怪を恐る心なく真心の佛を拝せ
んとを却て更ふ一夢を見る乃子ハ三藏の曰。我今夜の夢ハ
なずとて則ち鬼王の夢ふあるべ玉珪を乃て夢中の如むを説
せられば行者感歎して照顧ある上ハ夢中の如将ふ真なるべ。吾
明日冤魂の仇を報ずべとて三藏其縁を問行者
其間一根の毫毛を抜て変て一個の紅金漆の匣となし。玉珪を把て

匣の内ふ収めて曰。師父明日此物を持て手中ふ捧げ錦襴の袈裟を穿て正殿ふいて如此々々ゆへ他ゑ手信ぢべ。三藏ぜて此謀甚だ良しとて各種々計議する処ふ不孝岡東方發白て行者角手雲ふ跳上て四方を見るふ果て正面ふ一座の城地あり愁雲漠々として妖気紛々たるふ忽ち砲声響て東門より一隊の人馬内ゑ出是就ち採揃の軍兵なり。軍中ふ一個の小將軍あり頭ふ盔甲を頂て手ふ宝剣を執腰ふ弓箭を帶て隱々たる帝王の像あり。行者心中ふ考へて這ゑ太子あるべ。吾一個の戯をなし他を寺内へ誘んとて。雲頭を下て身を揺て変て白兎となり太子の馬前をゑけ回る。太子是を見て一箭前を引て兵と放つ。行者此矢を把住跑きて宝林寺の山門ふいて忽ち本相を現ハ

矢をとて門の檻ふ挿て走り入て三藏ふ見て曰。頃て太子きゑれ吾を那邉の裡へ入て。変て二す絆の小和尚と成れで三藏是を紅金漆の匣ふ入鎖を封て捆待て。岡ふ那太子ハ白兎を追て山門ふいて見るふ兎ハ見えず。件の矢ハ門上ふ挿て。太子大いに怪て更ふ其人を知ざれと馬ゑけ寄て矢を拔て頭を擡て山門の額を見れで勅賜宝林寺とあり遂ふ馬を下て進て山門ふ入る衆僧ゑ驚て慌て出きて頭を叩て迎ハ太子正殿ふいて佛像を拜し終て。目を上て見るふ正面ふ一個の和尚坐居て。太子怒て曰。此和尚我きるを悼らずと坐て動さず。無礼なり。急て引下せよと付て左右の臣命ふ應して三藏を把て下す。太子叱て曰。汝是那方の者で。三藏礼を施して曰。貧僧ハ東土大唐の者王命ふ依て西天ふ

行者
烏雞國太子
田猟追白兎

いまり佛を拜し宝貝を進むる者なり。太子曰。汝何の宝貝うあるや。三藏ゞ曰我身上の袈裟是第三等の宝なり又第二等第二等の宝貝あり。太子曰。汝ゞ袈裟半辺の臂をあらず。何を宝貝と称するか。三藏ゞ曰。這袈裟全躰なるゆゑ特あり。空のごとく統て曰

佛衣偏祖不須論内隱眞如脫世塵万線千針
成正果九珠八寶合元神曾經仙女參修製遺
賜禪僧靜垢身我見駕不迎猶自可你的又寃

未報狂為人

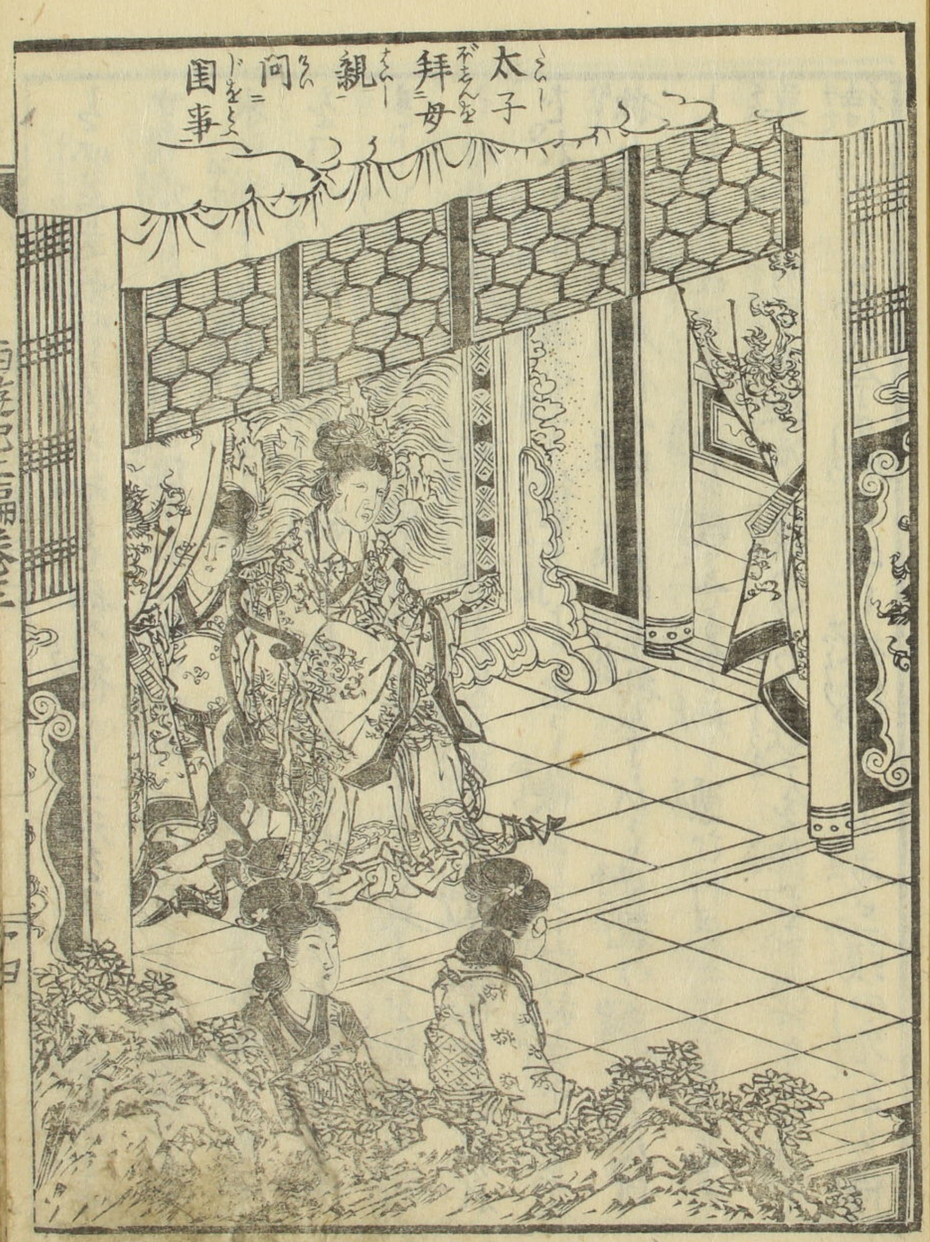
太子曰大なる怒て曰。此狂僧何ぞ乱説なるや。你縁の袈裟を憑ゞ自ら繕る。我又の寛何国か有て未ゞ報ぎるや。汝猶くられ繕ん八我宝剣汝ゞ頭か望ん。三藏ゞ曰貧道ゞ実か見ん ちゞ。只這紅匣の裡か一件の宝貝あり。唐ゞ主帝貨とりゝ。過去未来のことを知る。殿下開て問を即ち知る。太子曰。紅匣の蓋を開て三寸許の小和尚跳出て丙辺へ乱走る。太子嘲て曰。此星ゞ人よゝ何ぞ走ん。行者是を見て曰汝か小を きらふ就ち大となるべし。腰を一ゝ伸せば七分となる。太子ゞ驚ん。太子向て曰。主帝貨老和尚汝ゞ過去未来のことを知ゞ試か我国中のゝを説て看よ。行者ゞ曰。汝八是烏雞国王の太子。五年前天大の旱を。汝ゞ家皇帝雨を祈るか効なし。汝か鐘南山ゞ一個の道士きたる。他よゝ風を呼び雨を呼。汝ゞ父王結拜して兄弟となる。夫斯の道ゞなるゆゑ。太子驚て曰。誠か斯の如ゞ。但二年か前ゞ那道士風化して行処を知ゞず。行者ゞ曰。今皇帝と称する者八誰なるや。太子ゞ曰。是我父王なり。行者ゞ曰

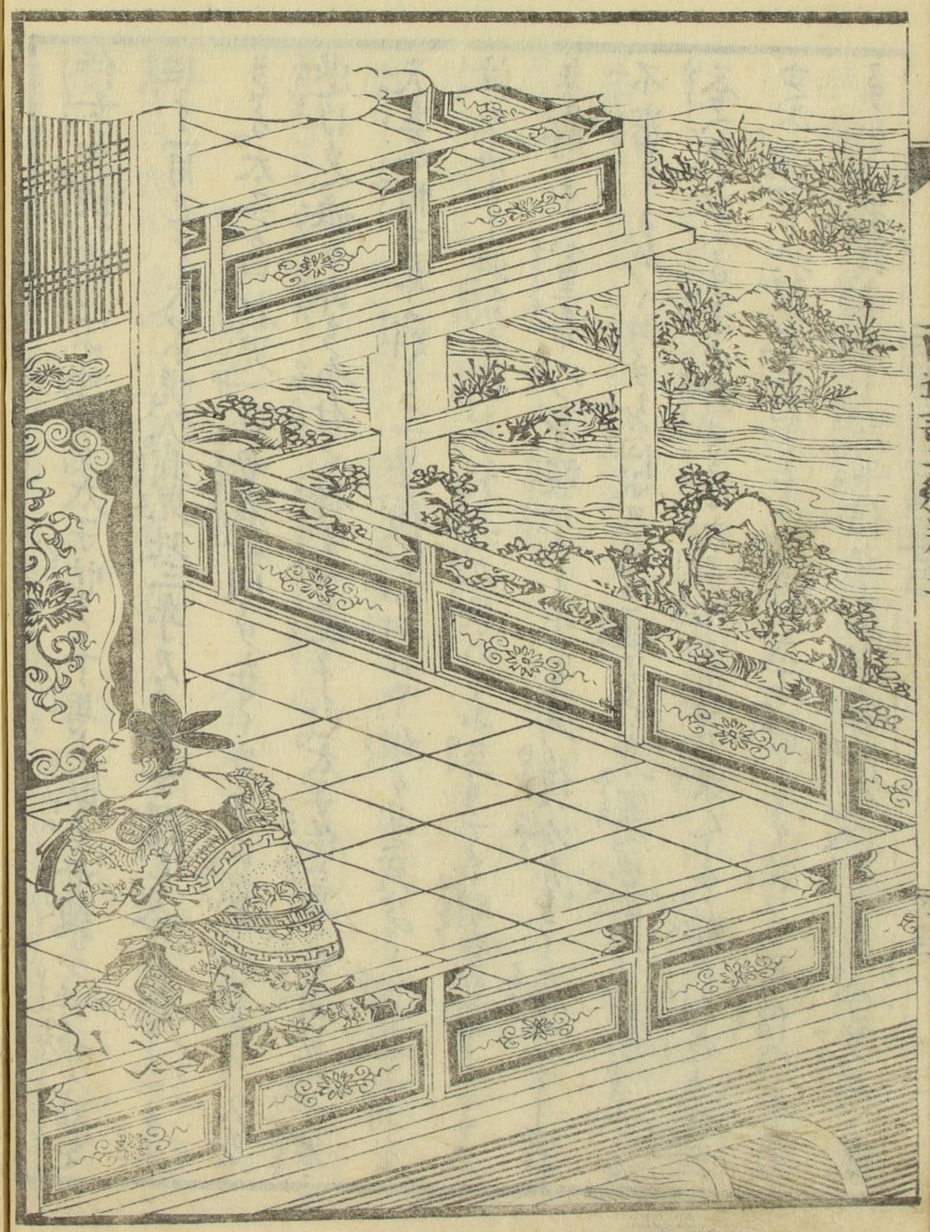
抱て高く笑ひ。太子怒て曰。汝何ぞ嬉笑とするや。行者が曰。我汝が一大事を告ん衆人を退け給へ。太子安て則ち令を出して人馬を門外に退け。迎ふ三藏と行者と太子只三個なり。行者太つに向ひ。耶風化して去れ。是汝が父王なり。今位に坐して居る。是道士なると雖も疑ひて信用せず。行者堪ずして五帝貨の像を変じて本相を現じて曰。我假に五帝貨となる。汝が実を告ずして愚昧にして信用せず。今八定なる照顧を以て汝が実は我が邪長老の大徒弟孫行者なり。師父を獲て西天に行経をする。我師前後此里に宿して一場の怪夢を見る。夢に你が父王の冤鬼きたる。那道士は哩孔御花園に遊びて琉璃井へ撞落されて水死して其骸は邪怪王の像と雑て位に在ても満朝の官人凡眼に見ざること能ず汝も幼年にして知ず其妖怪なる照顧は其怪を官中に入れ是母子相逢て統結せず自然已が悪まるるを恐れて頭を垂れ且御花園の琉璃井は石板を以て口を掩ひ土を布き芭蕉一株を植御花園を閉て人を出さざるも此虫なること汝が父王の冤鬼我師父に委しく紛れ其仇を報ぜんと欲て記ふと雖ども白玉珪を以て如此。汝今日出て採猟するに成かば依て我白兎と変じ汝が矢に中て倒れ汝を引て這来ふきて此因縁を統ん為なり。邪紅匣の内より玉珪を取り出して見せれば太子取て熟視るに実も父王の所持の玉珪にして道士の風化せし時偷去て物なれば大に驚て且行者の統ところの身に半ば信じ半ば疑て決せず。行者又曰。汝尚

狐疑を抱くべきに非ず。汝が娘を面會し。他が夫妻恩愛の情三年前と三年ほど如何と問其言を聞て眞假を知るべし。疑れば。太子実もっとも王琵を取収まり出んとす。行者引留て曰。汝はまづ入て茲に住置よりまを漏さぬ切をなすべし。汝一個正陽門より後宰門に入て宮中に入り。母親に見へて悄然に低言て問あるべし。那怪神通廣大なれば女あるも覚ず。汝母子の性命保ちがたし。誠多あり。太子遵て教に遵て出門を去り出軍士に令し。汝は此に在て屯し我回るを待べし。独馬に鞭を中て走去る。

嬰児問母知邪正　金木参伍見假真

却説太子は城中へ入り。行者が教のごとく暗に後宰門より逕て皇宮に入錦香亭に入り娘々を乃ちに顔色昔に変て裏へ幾個の侍女を従へ亭上に坐せり。太子忙て下馬し跪て母親を呼。娘々驚て抬て一目見て大いに悅び。我兒此三年乃ちまを得たり。今日何ぞ来きたる。太子が曰。孩兒一言母君に問ん在て願くは左右の人を退け。娘々即ち侍女を退ぞむ。太子低言て母親に問。母君夫妻の情三年前と三年後と如何ぞや。娘々是を聞て満眼に涙を流め。汝は此訳を問ん。我九泉の下に至りても明白なり。その三年前は皇帝の身疲なるに。三年乃後は冷なること氷のごとし。我不審に堪ずして此を問に。老は逼て身裏に前のごとくなるべし。終に太子忙て馬に乗て娘々を引任め。汝何ぞ遠く此処を去んとするや。太子隠して能ず。唐僧の夢の事を語る。我未だ手疑半信なるに。今母君の曰を聞て。今文王と


太子
拜母
親
問
国事



ゝる必ず是妖怪なるを知ゝ神の裡より玉珠を取出ゝ娘を示ゝ
せ娘ゝ又涙を流ゝ曰我も昨夜一個の夢を見ゝ汝が父王
水に淋々ゝ我面前へきゝ我死ゝれども魂魄唐僧を拜ゝ
を招怪を降ゝ前身を救ゝるを憑きゝゝと知ひゝ夢覚ゝき
きゝゝ疑ひまゝ晴さるに何ゝ知らん汝又きゝゝ共ゝを統急に行
ゝ唐僧を請さゝり妖魔を降ゝゝ父王艱育の恩に報よゝひゝれ
ん太子忙ゝ馬に上り後宮門より出ゝ鞭を上ゝ宝林寺にいゝ又
独山門に入ゝ唐僧に謁ゝ前の礼礼をゝべゝ母親の夢をゝゝ何
ゝゝか力を扶け父の仇を殺させのゝと拜ゝ憑む行者曰今日はもぞに
暮に近ゝ明早老孫汝と俱に妖魔を降ゝべゝ汝先ゝり去て
待よ太子が曰我今日城を出ゝ探猟ゝるに三頭の兎をも得

ゝを斯ゝハ城へ回りゝゝ行者が曰愚ゝるかゝれ我汝に妻ゝ切物をあゝよ
ゝゝゝゝ雲端に跳上ゝ捻訣念咒ゝゝ山神土地神一同に集来
ゝ行者命ゝゝ曰汝に妻女の野物を攫ひ四十里の路上に出ゝ太
子に取去ゝゝ命ゝ衆神領掌ゝゝ別ゝ行者ハ雲頭を下
ゝ太子に向ひ我ゝゝに汝ゝゝ行らひゝり早く城に入れ太子恩戒謝ゝ
ゝ衆軍に令をつゝく城へ回る果ゝゝ路上妻ゝ野物有れば妻女の
重士争ひゝ是を捉へ勇進ゝ太子の大に悦ひ一更の間に城中へ帰
ゝ入れ扨孫行者ハ唐僧に向ひゝ曰老孫明早那城中に至ゝ人を降
さんと嚢の物を取出ゝ安ゝとゝ倩ゝ人を一難あり三蔵白
如何なるゝゝ行者が曰那怪三年皇帝に従西班の文武と共に楽
ん老孫那を合手る間百官に何の照顧あるゝ向人に一定なる登逆

なくてそ罪名をさゞがゝ因く我れ知ふ。八戒を賺くく那皇帝の
死を尋ひ出ゝ明日城ふいりて那妖怪を去ん。他り照顔呼ひ出せば
則ち屍を他ふ着ゝ去殺ん。ゆゑふ文武百官敢て異論いはず。三藏
安く汝ゝ死ふ討ひいへ命ぞ。行者就ち八戒が睡て居ゝ床の辺て小行
呼覚せば。那獣子眼を覚さず。行者腹を立て耳を執く強く引ふ。
ようゝふ眼を開ひおゝ疾く哥々何を戯るやゝ。行者が曰。茲ふ一個の怪
商議あり。八戒目をこすりなゞら曰。何の商議そ。行者が曰。日間那太
子の日伴の妖怪ふ一件の宝貝あり。我明日城ふ進ゝ他と戦ふ。他
宝貝をもつて我を降さば功労画餅となる。先へ迴て槍去ふ。
不如。我其隠ゝ所を中のおり。汝行く偷きゝ八戒よろこびゝ曰。其
宝貝を取得さば。我ふ与ふ。行者黙首ふ汝ば得を

ん獣子大ふ悅び起て衣服を綢へ。行者ふ命ふ祥雲を起ゝ跳
上り城中へ飛行雲頭を下る。此同方ふ二更の同分なり。行者八戒を誘て
御花園ふいりて門を去開く去ゝ四方を見廻ふ果為一株の芭蕉あり
行者八戒ふ曰。汝手戈動を宝貝此芭蕉樹の下ふあり。八戒心得鉋を上
て芭蕉を撞倒ゝ嘴をりて土を掘穿ふ。三四尺斜ふ行く石板あり
是を取退て乃ふ元来一口井なり。八戒が曰。哥々是ハ井なり。索なく
て下を取ることを不可。行者が曰。我ふ一條の金縄あり。汝先衣服を脱去
八戒衣服を脱ぐ赤身ふなる。其同行者鉄棒を取出ゝ七八丈の金
縄となゝ井の中へ放ち下せば。八戒是ふとりもつて手繰々てよゝと
水面ふいり呼ぶ曰。哥々何の宝貝もなく只是井水のみなり。行者が
曰。宝貝を水底ふ沉をあり。汝水中ふ潜て探ゝきゝ八戒縅と心

悟空八戒
穿御花園
需王屍

八戒

行者

ゆえん来水性あきて深く水中ゆくへ眼を開たるゆ一坐の殿閣
あり。額ゆ水晶宮の三字を寫し。八戒大ゆ驚たく曰。能了々々
是海底ゆきれ。茲ゆ井竜王の水晶宮ゆ入て。悶果く停空居
くを。巡水夜叉ゆたけく急ゆ宮中ゆへ竜王ゆ告く曰。上より一個の
長嘴大耳の和尚を下しきくい井竜王ゆ曰。是天蓬元帥なくん。昨
夜夜遊神烏雞国王の魂霊を送り唐僧ゆ見へさせ。毎天大聖を
請く妖を降さんとす。ゆ大聖天蓬元帥をく烏雞国王の
屍を取しむるなくゆく。即ち門を出呼ぶ曰。天蓬元帥結裡ゆへて
坐せよと。八戒是をゆく僅ゆよろこび迚ゆ宮中ゆ入上面ゆ坐す。竜
王ゆ曰元帥何の為茲ゆきるや。八戒ゆ曰我きろく宝貝を求む。竜
王ゆ曰。元帥我此所ゆ宝貝なく那裡ゆて宝貝あれゆ我取ゆく

きくくゆ成くく元帥自くきろく取べくく。八戒を引く廊廡の
いくつ一個の死人を指ざく曰。他即ち宝貝なり。八戒是をゆ那死人
頭ゆ天冠を頂き身ゆ赭黄袍を穿ち無憂履をゆ珞玉帯を繫
く。八戒くくゆく曰是何ぞ宝貝なくん竜王ゆ曰元帥ちくゆ是烏雞
国の屍なり井中より落下ゆより。我他ゆ定顔珠をゆ故ゆ三
年を徑ゆ曾く像を壞ゆ。汝此屍を駝きく大聖ゆ乃ち起元問
生の法をりつく再世せくよ然ゆ如何なる宝貝をゆ得ん。八戒腹
を立。我何ぞ死人を弦去んや。ゆ忌そくく身を搏ゆき出る
竜王夜叉ゆ令くく屍を宮門の外へ丟下す。八戒是をゆ見れくく急
ゆ水際ゆ浮き出く曰。師兄金繩を下しく岸上ゆ行者白汝宝貝を
取さくれゆ八戒ゆ曰。更ゆ宝貝なく。只井竜王教く我ゆ一個の屍を弦

去とのたまふ。我是を昔ざ。行者の曰。是宝貝なり何ぞ欲き。
ゆ。八戒の曰。屍を欲ずを悪む。汝欲するなら我ふ換て欲き給
行者曰。汝欲きならば我八郎ちゃうと去て安靖ム。汝長く井中
ふ居よ。と洋と回去んとす。八戒大ふ慌て曰。哥々回去なれば我屍
を欲きなん。再度水底ふて屍を捜し背ふ欲水面ふ攪て出
呼び曰。哥々即ち欲きなれ。金縄を下せ。行者是欲て那金索を
伸下せば。八戒金索の端ヶ咬付。行者ふ曳上らるゝ漸ふ井口を出屍
を放下して身を拭ひ衣服を穿。行者玉の容貌生るゝを紀をて
不審。何ぞ斯のごとくなるやと問。八戒那井竜王の小一條を貌して一
遍を行者悦び造化々々。我ふ明日早く大功をなさん。汝快く屍を欲
きなれ。捻訣念咒巽地ふ向て一口の気を吸一陣の風を吹起して

八戒とともふ城地をまるき廷ふ寺中ふとりきたる。八戒禅堂の前ふ
屍を去下して曰。師父起きたまへ。師兄我を欺て国王の屍を
取きたりたり。三蔵はて汝僧ともふ門を開て立出て乃ち国王の容
顔を変ずを活ごとくなれば不覚涙を流して雨のごとし。八戒
獣子腹を抱て大ふ笑て曰。他又師父のたゆ家を哭ゆ。何ぞ
哭ずや。三蔵八戒を叱て出家人ち慈悲を本とす。汝何ぞ這
等心硬や。八戒の曰。是心硬ふあらず。井竜王我ふ教て曰。大聖ふて起
死回生の法をもて蘇らせよと。師父さらば憐みを加て何ぞ外ふ向生
を求むべし。三蔵よりて行者ふ向ひ。汝早く手段あり早く醫治
よ。行者の曰。師父又獣子の乱統を安く信じ給へ。此国王ちゃうの年何ぞ蘇生ることを得ん。三蔵実もとなく罪んとして八戒又

勸ていはく。師父他ふ弱さんをもつて。那兄を念じ國王を治せんことを求め多へ。三藏ものこと八戒ふ縋き行者ふ向ひ。汝國王を医せんで驚絶兄を念じんこれあるも尚医治ともなし。孫行者大いふ恐る。師父ものらす念ずふ。我思惟ものこと心中八戒を恨ものゝ。其手段をこゝろひ問らしもの

繪本西遊記二編巻之三畢